

昔、東北のある村にこんなお話があったそうなの。

その村に佐兵衛と言う頓智の上手な男がいました。

ところが佐兵衛の家は貧乏で、着ている着物は継ぎの当たったボロで、しかもその着物にはいつもシラミがたかっていた。

ある日、お金が必要になった佐兵衛は、家の中で一番上等な着物を質屋へ持って行きました。すると、質屋の番頭が、

「おい、佐兵衛よ。着物はいいものだがお前の着物には、シラミがいっぱいたかっているぞ」

「うん。確かにたかっているな。だが、お前さんの店では表に《何でもお受けします》と書いてあるぞ」

「まあ、それはそうだが」

「そうだろう。それじゃあ着物と一緒にシラミも預かったと、ちゃんと質札に書いてくれよ」

「シラミをか？ まあいいが、それでシラミの数はどれだけだ？」

「そうだな。一升のシラミを預かったと書いてくれ」

「へいへい、一升のシラミね」

番頭がその通りに書いて渡すと、佐兵衛は質札を見てニヤリと笑って帰りました。

そして数日後、佐兵衛はお金を持って着物を引き取りに来ました。着物を受け取った佐兵衛は質札を取り出すと番頭に言いました。

「確かに着物は受け取ったが、でも、返してもらう物がまだ足りないぞ」

「足りないって、何が足りない？」

「一升のシラミだ。質札にちゃんと書いてあるものだろう。だからシラミも返してもらわねえとな」

「へっ？」

シラミの事など冗談だと思っていたのですが、確かに質札に書いて渡したので、客から返せと言われれば返さなくてはなりません。でもシラミを一升なんて、どこを探してもありません。しかしこの番頭も頓智のきいた男でした。

番頭は、頭をかきながら、

「まったく、佐兵衛にはかなわんな。一両日、時間をくれんか」と、佐兵衛に頼みました。

須藤 健一

数日後、佐兵衛が質屋に行くと一升枡に何やら一杯になったものを渡されました。

「なんだこれは」と佐兵衛が問うと、

「お前さんの持ってきた着物のシラミは、蔵に入れてある間に全部逃げたり死んだりしてしまった。それで、新しい藪虱というヤブにおけるシラミを集めてきた」

と答えながら、番頭は一升枡の中のものをつまんで佐兵衛の着物に擦り付けました。

「ほらこうすればお前さんが持ってきた着物についていたシラミと同じだろう。ちょうど一升ある。持って帰ってくれ」

佐兵衛は一升枡を持たずにすすぐと帰っていききました、とき。

ヤブジラミはセリ科ヤブジラミ属の越年草。北海道から南西諸島まで日本全土の野原や道端などに普通に生える。背丈は30cm-80cmほど。葉は長さ5-10cm、2-3回の羽状複葉、小葉は細かく切れ込み、両面に粗い短毛が見られる。5月-7月に茎や分枝の先端に複散形花序を出し、白色~わずかに淡紅紫色の小さな花を付ける。花卉は5枚、大きさは不揃いで外側の花卉が大きい。果実は長さ2.5~4mmの卵状楕円形で、表面に基部から湾曲した棘を密生する。この鉤状に曲がった棘で動物の毛や人の衣類にくっつく。和名は、果実が熟れる頃に藪の中を歩くと衣類にくっつき、ちょうど虱のようにみえることから名付けられた。

